

エデュコ **Educo**

No.51
2020年

池田 理代子さん

巻頭インタビュー p.2
劇画家・声楽家・歌人



知っておきたい教育 NOW p.4

- ① 小学校での教科化を受けた、外国語科における小中接続・連携
- ② 小中連携を円滑に行うために
- ③ 現場における小中連携の現実的な課題とその対処のために

きょういく見聞録 p.8

楽しみに思える未来の創造
「みらい科」プロジェクト

地球となかよしトピックス p.10

北杜から世界へ
～SDGsを見据えた総合的な学習の時間を通して～

Information 北から南から p.12

第17回 地球となかよしメッセージ入賞作品発表 p.14

地球となかよしゼミナール p.18

美を求める心について
－アートと教育 ①－

コラム p.19

オリンピック・パラリンピック教育の鍵を握る
ミドルリーダーたち

ほっとな出会い p.20

地球の広報・
旅人・エッセイスト たかの てるこさん

ベルサイユのばら，オペラ，短歌 ～凜として生きるために

劇画家・声楽家・歌人 | 池田 理代子さん

多感な少女時代
漫画家としての原点は紙芝居

子どものころは本当に何をやってものろまでだめな子でした。一日中アリの行列を見ていたり、クモが巣を張っているのを眺めるのが大好きだったのです。いわゆる、すこしはみ出した子だったのかもしれませんが、ぐずなもので、毎日のように父に引っぱられていました。

漫画を好きになった最初のきっかけは、近所にやってくる紙芝居屋さんです。夢中になって紙芝居屋のおじさんのあとをどこまでも追いかけて、迷子になっちゃうような子でした。漫画だけじゃなく、子どものころはいろいろな本を読んでいたね。実は、もともとは学者か小説家になりたかったのです。

いつも群れから一人離れて、変わった子だと言われていたのですが、自分の興味が向く対象がいろいろあったので全く気になりませんでした。こんなに好きで興味をもてるものがあるのだから、人から何と言われようと、仲間はずれだろうといいじゃないかって思っていましたね。

そんな子だったので、先生も困り果てて、当時母親はしょっちゅう呼び出されていました。でも母は、「子どもというのは一人ひとり特質がありますから、この子は時間ばかりますけれどもやれば必ずできるので、どうか長い目で見てやってください」と言っ

くれたんですね。

大学進学の際も、父は女に教育は要らないという考えでしたが、母が後押しをしてくれました。母は当時としては斬新なものの考え方をしていましたね。好きなことはたくさんあったのですが、大抵のことは応援してくれました。

漫画を描き始めたのは大学時代からでしたが、最初から特に漫画家を志したわけではなかったんですよ。というのも、

当時は親から独立するために、本当にいろんな仕事をしていました。工場で働いたり、ウエイトレスのアルバイトをしたり。そうするうちに、自分は人と会うのが苦手だから、一人で部屋に閉じこもってできる仕事に向いているとわかってきました。人前に出ないですむ仕事ってなんだろう、小説家か、漫画家くらいかなって思うようになったのがきっかけです。ですから、多くの仕事を経験するなかで、自然とこの世界にたどりついた感じですよ。

ベルばらブーム到来

24歳の時に漫画「ベルサイユのばら」の連載をスタートさせたのですが、連載を始めるときは編集部からかなりの反対にあいました。当時、そもそも漫画は害毒だって考えが一般的だったのですが、少女漫画はさらに輪をかけて地位が低くて。おんな子どもにも高尚な歴史ものなんか読ませたって、当たる



PROFILE

1947年大阪府生まれ。東京教育大学（現・筑波大学）在学中より漫画を書き始める。1972年から連載を開始した「ベルサイユのばら」が大ヒット。宝塚歌劇団により舞台化されると「ベルばら」ブームが沸き起こり、社会現象となる。ほかの代表作に「オルフェウスの窓」「女帝エカテリーナ」など。40代から声楽家を志し、47歳で東京音楽大学声楽科に入学。卒業後はソプラノ歌手として幅広く活動。

わけがないと言われましたね。

でも私は自分のなかですっと温めてきた物語でしたし、当たらなかつたらすぐに打ち切りにしますよと言われても、必ず当ててみせますと約束して、逆風のなかスタートしました。

結果、多くの読者に受け入れてもらえて、宝塚では舞台化されて社会現象になりました。でも、世間が騒いであるときには、もうこっちは次の作品に取り掛かっているのです。ベルばら旋風が起こっているときも私は「何か騒いでいるらしい」程度の感覚で、すでに次の作品のことで頭がいっぱいでしたね。

多くの作品を描いてきて、その時々エピソードが思い浮かばなくてウンウン唸ったことはありますが、「描けない」「もう描くことがない」と思ったことは特にないですね。体力さえあれば、描きたかったテーマは今でもまだたくさんあります。



創作の源泉についてよく聞かれますが、インスピレーションがいつどこから湧いてくるのか、自分でもよくわからないんです。何がどうと簡単に言い切れることはできませんが、今までの人生で自分が読んだ本とか、勉強したこと、体験してきたこと、すべてが源になっているのではないのでしょうか。

**やり残した夢を叶えるため
音大に入学**

40代になったころ、人生でやり残したことは何かと考えたとき、音大受験が頭に浮かびました。

実は中学の終わりがらに音大を受験しようと思って、ピアノをやっていたことがあります。そのときに受験勉強を開始したのですが、才能がないなあと痛感して、自分からやめてしまいました。その後、高校時代はブラスバンド部に入って活動していました。音楽が好きな気持ちは胸の奥にずっとありましたね。

そうはいっても、実際に40代で音大受験に向けて動き出すまでには、かなり時間がかかりました。不安でしたし、悩みに悩みましたが、今やらなければ一生後悔すると決意して、漫画の仕事を整理して音大受験の勉強を開始

したんです。自分にとってやり残した夢だったので、死ぬまでにどうしてもやりたかった。当時は社会人枠もなく、一般人試しかなかったもので若い学生さんたちと同条件で競うのは大変でしたが、東京音楽大学の声楽科に無事合格できました。

やりたいことがあるけれど、怖くて一歩が踏み出せないという方によく私は言うんです。それはどうしても叶えない夢じゃないから、別にいいんじゃないですか。その人にとってどうしてもやりたいことなら、条件さえそろえば必ずやると思う。だから一歩踏み出す勇気が出ないのは、どうしてもやりたいことじゃないと思うのです。

教師が子どもに及ぼす影響

今の先生は本当に大変だと思います。私たちの時代は先生って絶対的な存在でしたし、親も先生の言うことは聞くようにとわが子を教育していました。ですが今の時代は、子どもより先に親の教育をしなきゃいけないと教師をしていた友人がこぼしていました。

学校の先生はかつて憧れの職業の一つだったのですが、今は勉強を教えるほかにやるのがあまりにも多すぎて、親にもあれこれ言われますし、生半可な気持ちでは到底なりたくないなんて言えない状況ですね。

私は割と先生には恵まれていたと思います。中学生のころ初めて、国語の先生に創作をする喜びを教えていただきました。授業で小説を書いたり、短

歌もそのときに初めてふれて。そこからずっと短歌を作り続けて、もうじき初めての短歌集が出る予定です。

すごく好きだった女性の先生が、あんまりにも言うことを聞かずに悪さばかりしている男の子たちを、泣きながらビンタしていらした姿が今でもすごく印象に残っています。どうしてもかかってくれないのって、ボロボロ涙をこぼしながら。体罰はいけないという考え方には私は基本的には賛成ですが、大事なものはその行為の根底に愛があるかどうかではないのでしょうか。

子どもに何かを教えるというのはやはりすばらしい職業だと思います。方法は違いますが、教える、伝えるという点では漫画も似たようなものかなと感じています。

学校の先生にはがんばってほしいですよ。親に次いで、人生の二番目にふれ合う大人になるわけですから。そのときよい先生に巡り合って、心に何か影響を受けるかどうかで、その人の人生が変わりますからね。

自己肯定感を形成する 親の愛情

個性を伸ばす教育とか、子どもの自主性を重んじる教育とか、今はいろいろ叫ばれていますけれども、まず親の愛情が一番大事だと思います。教育より先に人生で出会うものですから。

私もずっと、自分がだめな子だと思っていた。自己肯定感は低かったですよ。何をやってもぐずぐずのろま

で、おまけに不細工だし。うちの妹がすごく可愛かったので、妹さんはあんなに可愛いのにどうしてあなたはそんなに不細工なのって言われておりまして。のろまだから父親には朝晩張り倒されていたし。私なんか生まれてこないほうがよかったのかなあとずっと思っていましたね。

でも中学生のころのあるとき、母親の日記を盗み読みしてしまったことがあって。そこにね、「愛する夫の子を早くこの胸に抱きたい」と書いてあるの。日付を見たら、私がお腹にいるときでした。私は長女で、両親にとつて初めての子どもなんです。それを読んで、自分はこんなにも望まれて生まれてきたんだってわかりました。嬉しかったですね。

父は戦争中、南方や中国で従軍していました。南方の戦線はほとんど玉砕しているような過酷な戦場です。そこを生き延びて捕虜になって、輸送船に乗って命からがら日本に帰ってきたのです。ですから、自分が命を得てここにいる、それがどんなにありがたいことかあるとき気づきましたね。今度出る歌集にも、いちばん初めに『父』という章を入れました。

子どもたちには「あなたの命はものすごく稀有なものなんだ」とってことをね、わかってほしいなと思います。そういうことをもつと、親が子どもに伝えてあげられるといいのではないのでしょうか。

小学校での教科化を受けた、外国語科における小中接続・連携



文教大学教育学部教授
金森 強

中学校の学習指導案に小学校との関連を記す

中学校の英語教員は、小学校学習指導要領はもちろん、小学校で用いられている教材（デジタルも含む）等にも目を通しておく必要がある。中学校の指導案に小学校の教材のどの単元・活動等と関連があるかを記すようにするとよい。そうすること

で、小学校の教育内容や教材を研究することが起こり、小学校の英語教育の内容を知るだけでなく、中学校の授業で小学校の教材や活動を用いることも可能になる。中学生のレベルに修正して用いることで、十分使用可能な教材となるはずである。小学校でなじみのある活動・教材であることから、学びへの抵抗や不安も少なく、自己の成長を振り返るよき機会となることも期待できる。

最後に

九年一貫の継続的な教育の実践を意識し、授業内容・方法・形態、教科用図書の使用に一貫性が生まれる小中合同の教務会議や意図的・計画的な人事交流を進め、小中が有機的なつながりを持ち、中一ギャップが生まれない工夫が求められる。

中学校側が小学校段階の英語教育を理解することから

小中の接続のために最も重要なことは、中学校側が小学校段階の英語教育について理解し、接続のための工夫ができるかどうかである。小学校が中学校につながるようになると、いわゆる中学校の前倒しで終わりがねない。小学校では、学習指導要領に示されている目標と内容に応じた指導を通して、英語を学ぶことへの動機づけや英語を用いて表現すること、人と関わることを楽しさや大切さに気づかせることを意識し、さまざまな気づきからメタ言語能力育成を目指す豊かな学びを提供すること

音声言語としての「英語」が使える日本人の育成を目指す

聞く、話す、読む、書くの4技能をバランスよく育むことが大切となるが、各段階で求められる指導のあり方を十分に把握しておく必要がある。小学校においては、「聞く」「話す」が主な言語活動になる。身近な

である。興味をもって英語を学ぶことができれば、結果として、基礎的な英語力を育むことにつながるはずである。「中学校英語への渴きを覚えさせて送り出す」と言う表現で小学校における英語教育のあり方を表現した教育長がいたが、まさにその通りである。

事に関して、実際に発せられた言葉から相手の考えや気持ちをくみ取ったり、自分の考えや気持ちを表現したりするための音声面の工夫が起こつてこそ、ねらいとしている資力・能力の育成につながるといえる。「文字を見なければ聴くだけでは理解できない英語力」というこれまでの英語教育の失敗を繰り返してはならない。音声言語としての言語活動を豊富にもつことで、文字言語としての基礎力の育成に努めることが重要である。また、文字言語としての英語への興味をもたせ、中学校における英語学習にスムーズにつながるために、「読みたい」「書いてみたい」という気持ちを児童にもたせることができる言語活動を多く提供できるように心掛けたい。

小中連携を円滑に行うために



東京都千代田区立九段中等教育学校
指導教諭
本多 敏幸

中学校英語科に小中連携

スタート!?

中学校英語科においては小中連携・接続はあまり重要視されなかった。これまで小学校外国語活動があ

ったにせよ、「英語は中学校から本格的に教える」という気持ちから以前と同様の指導が行われてきた(図1)。多くの教師にとって小中連携への意識はあっても具体化はなかった。しかし、これからは小学校での教科化を受け、ゼロからの指導ではなく、小学校の学習内容の上に積み重ねていく指導が必要になる(図2)。意識をした上に具体化しなければならぬ。効果的な連携・接続を行うには、小学校の指導内容や指導方法を勉強しなければならないこ

とは言うまでもない。小学校で扱われている教科書や教材を研究し、指導している場面(授業)を参観し、入学した生徒のパフォーマンスを見て判断し、それを基に英語力をさらに伸ばす指導を考えなければならない。

小中のりしろ部分や、

その後の授業で配慮すべきこと

きょうと

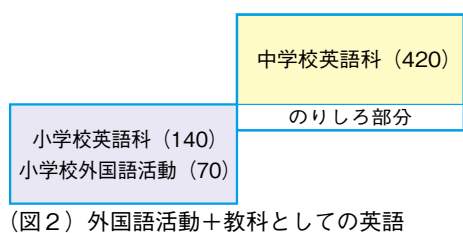
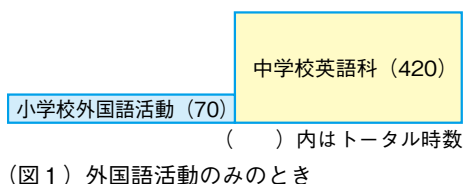
中学の指導に本格的に入る前の1〜2カ月間は、のりしろの期間といってもよいだろう。そこでは、①生徒の英語力(能力や知識)を見極めること、②小学校の学習内容の復習(使用)、③英語を苦手に思っている生徒への支援、④文字を使った活動への橋渡し、⑤中学校の授業への不

安の除去・軽減を考えながら指導を行い、今後の授業が円滑にいくようにする。実際に生徒に英語を使わせて、つまり言語活動を通して①から⑤のことを行いたい。その際、小学校と同じ活動にならないように留意すべきである。現在、中学1年生で行っている活動のほとんどが小学校で行われる可能性がある。全く同じ活動や指導を行うことで生徒を幻滅させないよう、努力と工夫が必要である。

4年間の英語学習を通して、生徒間の英語力の差がかなり大きくなると予想される。筆者の経験では、これまででは中学1年生の夏休み明けに差が始め、中学2年生の終わりにかなりの差が生じる。それが入学当初から顕著になりそうである(す

でなっているが)。このことに配慮することが中学校の指導で最も重要なことの1つである。授業が苦手な生徒ばかりにではなく、得意な生徒にも配慮しなければならない。言語活動を行う際、生徒全員にクリアさせたいレベルを設定しながら、英語が得意な生徒を伸ばす工夫を行う。例えば、話すことであれば、情報量を増やさせたり、さまざまな表現を使わせたりする。

本稿を読み返してみると、「しなくてはならない」「しが必要」という文言が多くなってしまった。中学教師にとつてこれまで経験したことのないことが始まる、いや、もう始まっている。生徒の英語力やコミュニケーション能力を大きく伸ばすことができるよう、小中連携・接続を上手に行いたいものである。



現場における小中連携の 現実的な課題と その対処のために



長野県松本市立島立小学校教頭
桐井 誠

ポイント

- ① 中学校が握る小中連携のカギ
- ② 小学校の新しい課題
- ③ 小中共通「授業は英語で」

ある研究会で「今日の小学校の授業は素晴らしかった。でも中学校の授業にも耐えられるようにしていかないと…」という発言があった。耐えられる？——あまりよいニュアンスには受け取れなかった。中学校英語教師としての自負も多少はある私、私以上に授業改善に打ち込む多くの方もたくさん知っている。でも妙に納得するような空気が会場全体に流れた

のであった。ここで言う「中学校の授業」とはどんな授業だろうか。ただ、小中連携を考えるポイントが見え隠れする場面でもある。

中学校に求められる 授業改善

ALTにお任せだった先生方は別として、小学校の先生方はこの9年間本当によく頑張ってきた。まさか英語の授業をするなど夢にも思っていなかった先生方が、各教科共通の授業づくりのノウハウを生かして、「導入↓展開↓まとめ」と「英語を使う活動」のある授業を手作りで行ってきた。細

やかな児童理解にも裏打ちされていた。

一方の中学校は、扱う言語材料が若干増えても、これまでの踏襲でできてしまう現状があった。言語活動に立脚した展開ならまだよいが、小学校の教科化を受け、中学校の高度化をと言われても、多様な生徒指導の前にChalk and Talk授業になってしまうという声を聞く。

また、現場には学力試験のためだとして、そういう授業を支持する声があるが、免許をもった英語教師として本当にそうかを疑ってみたい。三単現などの書き換え問

題の対策に躍起になっても、逆にそれが習熟や定着へのブレーキになっていることもある。1年生の1学期は特にカギとなる。

小学校でやっているから先を急げる…ではなく、繰り返し、広げ、深めていく展開を心したい。

社会科の授業を想起してみる。

同じ江戸時代でも小中高では扱い方や内容が異なる。中学校の内容を小学校にお願いしますというものではないはずである。ところが、外国語科ではなぜか早期の校種に先倒しをお願いを出しがちである。小学校の実際の授業、教科書や教材を見て英語教育への見方が変わったという先生が多い。小学校に何かを求めるのではなく、小学校の変化を受けて、中学校がどう変わるのかが小中連携のカギである。

次の段階に入った 小学校の課題

小学校には、自信をもってこれまでやってきたことを続け、専科教員を含め、学習指導要領や時数、

児童の実態を意識した先生方の授業マネジメント力をますます発揮してほしい。

私自身が現実的な課題とするのは3つある。

まず「文字指導」。漢字練習、習字、ひらがな、カタカナの指導は小学校の先生方のお家芸でもある。ただしそれは「十分に慣れ親しんだ日本語を書き写す」ことから始まっている。各種調査で「小学校でもっとやりたかったことが『読むこと』『書くこと』だから、小学生にも文字の早期導入を！」という論には飛躍がある。また、英語が嫌いだった教師でも書くことには不思議と慣れている。するとつい、プロセス抜きで「教えたくなってしまう」。

中学校でも「文字」「文法」「テキスト」はつながりやすい。ここを見誤ると中学校の入門期といわれた時代の早い段階での繰り返しにもなる。メールやSNSが全盛とはいえ、先を急ぎすぎず、音声への気づきからという言語習得プロセスの原点に立ちたい。

次に「教科書」。「本時や単元の

ゴールを設定し、めあてを示して追究の見通しをもち、練習してやってみて振り返り、またやってみる。」とすれば、範とすべき授業の展開でもあるのだが、「言語への気づき」「コミュニケーションの醍醐味」が後回しにならないだろうか。

これまでの小学校らしさと教科書をどう共存させていくか。教科書で教えるといつても、教科書は無視できず、忠実に進めれば進めるほど、予定調和化にもなりかねない。ありがたいという人もいるだろう。中学校が歩んできた道でもある。

最後に「評価」。今後の知見や正式に出される参考資料に注目したいが、testingではなく、evaluation（価値の積み上げ）の原則を忘れることなく進めたい。難航が予想されるがゆえの、魅力的な課題でもある。単元構想の中で4技能5領域と3つの評価の観点のマトリクスを意識するところからであろう。

小中共通「授業を英語で行うことを基本とする」

all in English

「英語のシャワーが流れ去るだけの先生オンステージ」「インプットが足りないというけれど、どこまでいったら十分なインプット？」

「Classroom English 以外は英語が出てこないし、good job! は連発しても、何を指してなのか伝えなくていいの？」など、熱心な先生なら一度は出会う課題であろう。「授業を英語で…」、言葉

の解釈はそれぞれあってよいが、私は「教師は英語で進める場面は英語で進めて理解や気づきを促す。」「行う」の主語は第一が児童生徒である。」としたい。教師の役割に限っても、題材や場面の導入、文構造の導入、taskの提示など、古くて新しいoral introduction（口頭導入）である。児童生徒が行うsmall talkが仮にうまくいかなかったも、そこでの気づきが大切なのである。即興的な対話を成功させようと、いろいろな手立てを仕組んでしまい、い

つの間にか「表現の思い出し会」になっていることもある。小さな積み重ねと繰り返しの言語活動である。そもそも児童生徒がそんなに高度なことを最初から行えるわけではないことを教師が自覚し、少しの進歩でも喜べる教師の感性をもちたい。

小学校の先生方は、「生の英語」よりもずっとわかりやすい「自分の英語」を児童に投げかけ、英語を使うモデルになしてほしい。日本語の補助も「適当に・適切に」使つて。

中学校の先生方は、英語のモデルという役割を加えて、気づきを促し、slow learnersにもadvanced learnersにも「わかる授業」の提供を続けたい。「下位生、上位生」という日本語は使わずに。小中共に、「教師」にあたる英語を「teacher」ではなく、「coordinator」としてみてはどうだろうか。🌸



発想の解放・本質や価値の共有 グラフィック・レコーディングの導入

本校の「みらい科」のもう一つの取り組みは、考えていることや話し合いの経過を視覚化するためのツールとして、企業に指導をお願いして導入したグラフィック・レコーディングです。これは4年生以上の取り組みですが、本校はもちろん、各企業や行政の現場でも素晴らしい効果をもたらしています。

当初研修を行った教員は、考えたことやイメージしたことを絵や文字にかき表して抽象化することの手法に苦戦しました。抽象化とは、「複数のことから共通のことを抜き出すこと」ですが、一言一句大切にしている我々の職種には、むしろ難しいのです。ところが子どもたちはいとも簡単に、しかも楽しくこれらをクリアしていきます。さらに、抽象化したいくつかの要素を概念化するので。

概念化とは、抽象化したことを一つの言葉やイメージで表すことです。これらの作業は、教師の板書通りにノートを取り、その後で感想を書くといった従来型の授業に革命をもたらしました。子どもたちは教師の話したこと（板書したこと）や、友達の



考えから聞き取ったこと、教科書から読み取ったことをもとに、「あーそうか、こういうことね」（抽象化）、「つまり、こういうことね」（概念化）と、自らノートや紙やホワイトボードに表現することを自在にやってのけるのです。しかも、それが楽しくてしょうがないと口にします。ですから、このことに取り組んでいる4年生以上の子どもたちのノートは、実に個性豊かで、しかも理解や解釈の軌跡が、一目でわかるようにまとめられています。さらに、これらの手法でまとめられたノートやシートなどをもとに、考えや解釈の共有も格段に進みました。昨年度一年間グラフィック・レコーディングに取り組んだ教員がたどり着いた答え、それは「解放」だったのです。

私たちの意図や計画をはるかに超えるポテンシャルを見せる子どもたちの成長に、全校の保護者からも熱い期待を感じています。それに応えるために、毎月2回ほど、放課後の部活動として、全校児童対象に開始したところ、50名を超える入部者が出るほどでした。今後、大学や企業と連携した活動を模索中です。

これからの社会とつなげるために 成果の発表

本校では、このような取り組みに代表される生活基盤のもと、子どもたちが、とても表情豊かで生き生き生活しています。時には子どもからの要望で、子ども自身が授業を行う場面もあります。未来を拓くのは、教員ではなく、子ども自身であることを実感する日々です。そのために私たち教員は何ができるかについて考えていかなければなりません。

令和2年度末(令和3年2月末)に、本校は全国(学校・行政・企業・一般)に向け、ほぼ丸一日の公開発表を計画しています。よろしければお越しください。



楽しみに思える未来の創造 「みらい科」 プロジェクト

落合第六小学校は、東京都新宿区の西端に位置し、周囲は閑静な住宅街です。本校が目ざすのは、これからの時代に起こりうるさまざまな課題を克服し、よりよい未来を創成する「自律して学ぶ人間」を目標とした教育活動です。本校では、平成31年度から文部科学省教育課程特例校の指定を受け、新教科「みらい科」を創設しています。

東京都 新宿区立落合第六小学校 校長 竹村 郷



教えずサポートする教育活動 自立から自律へ

本校の課題は、聞き分けが良く素直なのはいいのですが、指示待ちの子が多く見受けられることでした。そこで、子どもをもっと生き生きと意志をもって活動させたいという思いから、二つの取り組みを始動しました。

その一つが6年生が数ある候補地の中から下見をし、それをもとにプレゼンをつくり、全校での選挙を経て、4か所に分かれた縦割り全校遠足を実施する「おちろく遠足」です。特色としては、下見を手分けして6～8か所で行い、自分たちが企画しプレゼンまで行い4か所の遠足が採用されるコンペ方式をとっている点です。旅行社のように目的意識をもって企画し、発表も劇調に仕立てるなどして工夫し、勝ち抜かなければならないことは、かなりパワーのいることです。また総選挙は、土曜に公開しているため、保護者や地域の皆様も楽しみにしていて多面となる遠足のため人手不足のところを、お手伝いしてくださると申し出をいただいています。これらを経ての遠足当日は、教員は安全配慮に努め、上級生は下級生をリードし、和気あいあいのなか過

します。協力してくれる保護者も含めて、みんなが笑顔で過ごす、ご褒美のような一日です。

もう一つが、一年間を通じて取り組む縦割り班での創造活動「おちろく DASH」です。これは、それぞれの班で、自分たちが地域や保護者を巻き込んで、みんなが楽しめるプロジェクトを企画し、達成しようとするものです。今年度も、代表の子どもたちと決めた全体テーマ「これまでの常識を打ち破ろう」というスローガンのもと、各班で何に取り組むかという各チームのテーマ決定から始まりました。毎年のことなのですが、約束として、教師の先導や口出しは極力しないということにしているため、テーマ決めだけでも、10時間ぐらいいは費やすチームも少なくありません。何をしたいのか茫然と見つめる低学年に、6年生は一生懸命声をからしてリードし、担当教員は我慢してつきあいます。そのうち、いろいろと下調べをして提案をする子や思いついたアイデアを周りに説明をしだす子など、動きが出始め、イメージが共有できるまで話し合いは続きます。教員は、口出しできないのが苦行だと言いますが、子どもたちはテーマ決めの苦しい坂道を自力で上るのです。方向が決まると、坂を転がるように活動があちこちで始まります。今年度は、ホラー映画をつくりたいというグループ、落六図鑑をつくりたいというグループ、野菜を育てて調理しおもてなしをしたいというグループなどさまざまです。子どもたちの求めに応じて、地域や保護者の方に、協力者「マイスター」の募集をかけ、お手伝いをしてもらいます。毎週金曜日の午後は、「やったー、今日 DASH だ」という声があちこちで聞かれます。好きなことを好きな方法で、協力して、時には大人もお手伝いをして取り組む「おちろく DASH」は、2月下旬のオープンスクール（落六小の地域・保護者向け発表会）に向けて、加速していきます。





● カンティフェアのブース内



● オードラン萌さんから SDGs を学ぶ

山梨県北杜市立長坂小学校 教諭 溝口一康

北杜から世界へ

「SDGsを見据えた総合的な学習の時間を通して」

SDGs(SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS)。「持続可能な開発目標」。

2015年9月に国連サミットで採択された持続可能な世界を実現するための17の目標です。「地球上の誰一人として取り残さない」という理念を掲げ、日本を含め、多くの国でさまざまな取り組みが行われています。ここでは、山梨県北杜市立長坂小学校(児童数339人、16学級)の6年生が行った、SDGsを取り入れた総合的な学習の時間の様子を紹介します。

世界の状況を知る

7月。JICA(独立行政法人国際協力機構)のオードラン萌さんに来校していただき、世界の子どものたちの状況を教えていただきました。貧困のため学校に通うことができない子、飢餓で苦しむ子など、子どもたちにとっては驚きの連続でした。

また、世界の平和や環境問題に目を向けようというお話とともに、SDGsについてもふれてくださり、子どもたちの中にSDGsという言葉や、その考え方が浸透しはじまりました。

カンボジアの現状を知る

9月。シンガーソングライターの

岩崎健一さんは、山梨を中心にチャリティーコンサートを行い、カンボジアの支援活動に力を入れていきます。6年生の子どもたちのために来校し、カンボジアの学校の様子や地雷被害で苦しむ人たちのことを伝えてくださいました。子どもたちからは、「自分たちにできることをやろう!」という声が上がりました。

カンティフェア・学習発表会で発信する

10月。北杜市の高根町清里で毎年開催される「カンティフェア(収穫感謝祭)」に、6年生が参加しました。手作りのコースターや野菜の販売・募金活動などを行いました。また、平和や環境・SDGsなどに関し



●岩崎さんとの出会い



●学習発表会の様子



●募金などを岩崎さんに託しました



●学習発表会にて靴などを集めました



●カンティフェアの販売風景



●募金でカバンをプレゼント

翌年の5月、岩崎健一さんからメールが届きました。子どもたちが集めた募金でカンボジアの子どもたちにカバンを作りプレゼントしたとや、石けんを加工して届けてくださったことなどが書かれていました。SDGsを見据えての活動を通し、子どもたちの心には世界の現状に目を向け、これからも自分たちにできることをやっていこうという気持ちが根付きました。

自分たちにできることを考えていく

て、学んだことの掲示もしました。地域の方々や外国の方々と交流し、子どもたちは平和や環境に対する思いを伝えることができていました。学習発表会では、世界の内戦や貧困で苦しんでいる人々の状況を伝えるとともに、募金のほかに靴や石けんなどを寄付してもらえよう、見に来てくださった方々に呼びかけました。

全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

会津若松にはもともと、會津藩が子どものために策定した規範指針である「日新館童子訓(什の教え)」という教えがありました。これは、結びに「ならぬことはならぬ」という言葉で締めくくっていますが、やらなくてはいけないものはやらなくてははいけないし、逆にやってはいけないことはやってはいけないということを一貫して教えています。この会津の伝統的な規範意識を踏まえて青少年育成への思いを現代的に取りまとめたものが「あいづっこ宣言」です。

- 一 人をいたわります(親切, 命の尊重, ボランティア活動)
- 二 ありがとうごめんなさいを言います(感謝, 謝意, 礼儀, 言葉づかい)
- 三 がまんをします(わがまま, 失敗や困難体験, 最後までがんばる姿)
- 四 卑怯なふるまいをしません(自己中心, うそや人のいやがること, 正々堂々)
- 五 会津を誇り年上を敬います(地域理解, 年長者を尊敬, 地域愛)
- 六 夢に向かってがんばります(目標への努力,

夢の実現, よりよい会津の創世)
「**やっではならぬ やらねばならぬ ならぬことはならぬものです**」

(強い心, やるべきこと, 社会生活のルール)
わかりやすく, 身近な問題として捉えることができるように, 言いやすさも含めて表現している「あいづっこ宣言」は, 子どもの立場からは, 「このような子ども・会津人になります」という宣言ですが, 同時にまた, 大人の立場からは, 「子どもたちの手本となり, このような子ども・会津人を育てます」という宣言でもあります。子どもだけではなく大人も含めて皆同じ思いをもつことで, 一つ芯の通った教育ができるものと考えています。



福島

「ならぬ」とは ならぬものでね」

前会津若松市 教育長 本田 樹しげる



四街道市は千葉県の北西部に位置し, 緑豊かで住み心地のよい住宅都市として, 約95,000人の市民が生活しています。小学校は12校で約5,200名, 中学校は5校で約2,400名の児童生徒が通っています。

そうした中, ここ数年で外国にルーツをもつ児童生徒が急増してきました。

平成26年度に101名であったその数が今年度202名に倍増しています。そのうちアフガニスタン人が120名と半数以上を占めています。学校では, 日本語指導や授業の進め方に戸惑い, さらに文化や宗教上の違いのために生じるさまざまな学校生活への配慮に苦慮しております。その支援体制を早急に確立することが教育委員会の課題となっております。

一方, 千葉大学にはインターカルチュラル・スタディセンターという異文化間教育

を推進する組織があり, 多様な言語や文化的背景をもった人々と協働する, 地域社会システムの構築をサポートする活動を進めていました。

そこで, 今年4月15日に四街道市と千葉大学の間で, 外国にルーツをもつ児童生徒等の支援体制構築に向けた基本協定を結びました。そして, 「外国にルーツをもつ児童生徒への生活学習支援体制および日本語指導に関すること」「実践を担う教員に対する研修等を含めた人材育成に関すること」などについて連携・協力をお願いしております。

今後, 外国にルーツをもつ児童生徒が適切な教育を受けられるようにすると共に, 多様な価値観を認め共生していける児童生徒を育成していきたいと考えています。



千葉

外国にルーツをもつ児童生徒への支援

四街道市教育委員会 教育長 高橋 信彦

愛知

「アカウミガメ」から環境について考える 五並中学校のESD

豊橋市立五並中学校 校長 渡會 眞理子

愛知県の渥美半島の南、太平洋側に面した海岸を地元では親しみを込めて「表浜海岸」と呼んでいます。五並中学校は、「表浜海岸」を含めた豊かな自然と農業が盛んな地域にある全校120名の小規模な中学校です。

本校は、表浜海岸で、「小さな学校の大きな夢」を合い言葉に、昭和60年から連風揚げを始め、平成10年には世界記録を達成しギネスブックに登録されました。平成21年度からは、その舞台であった表浜海岸や五並校区の環境を学ぶ活動「表浜プロジェクト」をスタートさせました。さらに、平成26年度にはユネスコスクールに加盟し、ESD活動の一端として学年ごとに段階を追って環境学習を進め、環境への意識を高めています。

今年度1年生は、「守れ！私たちの表浜海岸～私たちにできること～」をテーマに、表浜海岸の保全活動から学んだことの中からアカウミガメについて愛知県ユネスコ交流会で発表しました。産卵のために表浜海岸にやってくる、絶滅危惧種に指定されているアカウミガメについて調べ学習を行い、アカウミガメを取り巻く環境の変化、上陸数が減少している理由などを知り、何とかしたいという思いをもったのです。何かできるのではないか、より多くの人に関心をもってほしい…と、考えた生徒たちは、交流会を通して、「ウミガメを救うためにできることはないか」「どうやって海岸ごみを減らすの

か」と、参加者に投げかけました。また、海洋プラスチックごみの問題へも関心を広げ、身近な問題と世界的な問題とをつなげて考える姿もみられます。

これからも、環境について学んでいくことを通して、地域から世界、そして、未来に目を向け、自分ができることを考え、行動していく生徒を育てていきたいと考えています。



り、中学生の活躍はなくてはならないものになっています。昨年の文化祭での江口会長さんの挨拶では、「これからも地域の若い人や中学生が郷土芸能に親しみ、地域の伝統を受け継いでほしい」と述べておられました。中学校としても今後も伝統芸能の継承に協力していく予定です。



大分

伝統芸能の継承～真玉歌舞伎保存会の協力による文化祭での歌舞伎公演～

豊後高田市立真玉中学校 校長 佐藤 重康

真玉歌舞伎は百年以上の長い歴史があり、古くは校区内の臼野地区の山畑歌舞伎に起源をもち、明治、大正、昭和初期にかけて盛んに公演されていました。その後、後継者不足から保存の危機を迎えた時期もありましたが、昭和54年に旧真玉町全体で真玉歌舞伎保存会を結成し今に至っています。

真玉中学校へは、現在の江口会長さんの協力で15年ほど前から、伝統文化継承のため文化祭の演目に組み入れられました。毎年演じる演目は「白波五人男・稲瀬川勢揃いの場」で、個性あふれる5人の盗賊団が捕り手に向かって生い立ちを語る場面を演じます。文化祭に向けては江口会長さんに何度も足を運んでいただき練習を重ねます。それを受け生徒は七五調の台詞を暗記して、感情を込めて表現し、力強く見得を切り、太鼓や拍子木も鳴らします。昨年の文化祭当日は、保存会の方々におしるいを塗ってかつらをかぶせていただき、伝統の衣装を身にまとい、本物の役者のように変装しました。体育館の舞台でスポットライトを浴びると、キリッと引き締まった表情になり、堂々と演じる生徒の姿にかけ声や多くの拍手が沸き起こりました。

その後は、校内文化祭だけでなく、新春公演、地域の文化祭、敬老会等で披露しています。現在保存会の方々も減少し、真玉中学校の文化祭や新春公演での発表が一番の活動となってお



地球となかよし メッセージ

1,000 篇余りの応募作品をいただき、子どもたちのこの地球の「現在」についての思いの深さをひしひしと感じ取りました。詩的でリズムカルな言語表現と、色彩鮮やかで力強い造形表現が際立ってきたようです。ただ、私の心、感じ方をもっと大胆に表現してほしいと願っています。 評：審査委員長 児島邦宏

◎後援／環境省、日本環境教育学会、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

学校賞：沖縄県 南城市立大里南小学校

入賞作品発表

旅するタネ

高村 桃子 静岡県 御殿場市立御殿場小学校 4年
(こどもエコクラブ「チーム YKM」)

旅するタネは鳥にふわりと乗った。

下車したところは、道路。

名を「どこんじょうトマト」に変え、今年の暑い夏を乗り切った。

その赤い実は熟し、よい香りが漂う。そして、私の口へコロリと入り、体中を旅する。

つながる命、つながる世界。トマトの力強い生命力で私は元気になっていく。

【評】 命のつながりの中に、鳥もトマトも私も生きている。お互いを支え合い、生かしている。私たちは次へ何をつなぎ、元気づけていくか。

地球となかよし大賞



人間緑化

松口 歩佳 大阪府 守口市立八雲中学校 3年



地球温暖化は、私が生まれる前から一向に止まらない。特に緑が少ないコンクリートジャングルの都市部は、ヒートアイランド現象により、夏場は猛暑日と熱帯夜が続く、灼熱地獄と化している。対策として、建築物の屋上や壁面に緑化が進められている。

さらに有効な打開策として、私は都市部にあふれる人間を緑化する、人間緑化を提案する。人間緑化に最適な植物の苔は、霧吹きで水をかけると、すぐに葉がひろがり光合成を始め、二酸化炭素を吸収し、新鮮な酸素を生み出す。

さあ、霧吹きを手に、人間緑化を上げよう！

世界中の人々に人間緑化が浸透し、心までもが緑化されて潤ったとき、地球温暖化は必ず止まる。

【評】 まず人間が、それ以上に人間の「心」が緑化されたとき、地球の温暖化は止まるという提案。その心に霧吹きし、潤いを取り戻そう。

地ちゅうと虫のえんそう会

原 琉斗^{りゅうと} 千葉県 市川市立宮久保小学校 2年

日本環境
教育学会賞

夏になると、セミがいつもたくさんあそびにきていたのに、今年はすくない。

みどりがたくさんあるすみやすい地きゅうに、虫たちや生きものがどんどんあつまってほしい。

ぼくたちも、森をきれいにし、虫と仲よく一しょに音がかく会ができればいいと思った。虫たちと仲よく、えんそうしているところを音ぶであらわした。



評 何と楽しそうな森のえんそう会でしよう。こんなにぎやかな地きゅうにしたいですね。地きゅうもニコリ、おどっています。



全国小中学校
環境教育研究会賞

せかいのおどり

戸村 麻奈末^{いひな} 徳島県 勝浦町立生比奈小学校 3年

わたしはあわおどりをしています。あわおどりをしていると、とても楽しいし、あわおどりをするので、たくさんの友だちができました。

この間、地元のおまつりでフラダンスをしているのを見ました。とてもきれいなドレスをきて、ハイビスカスの花を頭につけておどっていました。わたしもおどりたくなりました。

日本やせかいには、まだまだたくさんのおどりがあるんだろうと思います。もっとたくさんのおどりを見たいし、おどってみたいです。

評 なぜ、私たちはおどりたくなるのかな。うれしいから、楽しいから、友だちになりたいから。世界へと広がっていく、あわおどり。

生命の星

丸山 千咲都 兵庫県 加古川市立平岡中学校 3年

毎日新聞社賞

地球には、人以外にも数え切れないほどたくさんの動物、昆虫、植物があります。これらの生命は地球の長い歴史が作り出した環境によって維持されています。

人の環境破壊によって、今、その地球の環境、生物は失われつつあります。人が誕生するはるか前より、つながれてきた命が人の手によって一瞬で破壊される。そんなことがあっていいのでしょうか。

地球にすんでいるのは、人間だけじゃない。お互いに支え合って生きている。それをもう一度思い出す必要があるなと思いました。



評 命の星ともいえる地球が、人の手で破壊されつつある。この豊かな絵の世界が消え去りつつある。その暗闇の地球の姿を想起せよと。



毎日小学生
新聞賞

大切なぎょうじ

溝端 恵芽^{えめ} 海外 シンガポール日本人学校クレメンティ校 2年

ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんをお空におくするためにまい年、楽しみにしている花火大会が、たい風のため、はじめて中止になりました。ざんねんだったけど、「ちきゅうのおんどや、かんきょうがかわって、大さいがいもふえているからしかたないね。」と、おかあさんが言いました。

そのつぎのつぎの日の五山のおくり火は、キレイに見えました。わたしが、今、くらしているシンガポールみたいに、いろんなくにの人がたくさんいて、ニコニコ見ていました。

お空のみんなも見ていかな、おばあちゃんが小さいころより、むかしからある大切なぎょうじを、わたしがおばあちゃんになっても、ずっと、見られるといいなと思いました。

評 ひいおじいちゃんも見た五山のおくり火。あなたが大切に思っているかぎり、あなたのまごもひいまごも、きっと見られることでしょう。

海のパーティ

福崎 愛心 沖縄県 大里南小学校 2年



わたしが、海のいきものたちにしてあげたいことは、海にごみをすてないことです。なぜなら、海にごみをすてると、いやな気持ちになるからです。

そして、生きものたちがしあわせにいてほしいからです。

学校賞

こねこがいっぱい

たじまりづき 沖縄県 大里南小学校 2年



わたしは、ねこがすきなので、ねこがしあわせにくらせると、わたしはあんしんします。

入賞作品

あこがれのオオクワガタ

富谷 祐斗 海外 シカゴ双葉会日本人学校 4年



人間はそのままの姿で産まれてくる。虫は、卵から成虫になるまで、3段階も変化する。親に育ててもらわずに、卵から地面の下にもぐり、一人で育つ。敵も多いのに、がんばっている。

この夏、羽化のしゅんかんを見た。ゆっくり成虫になる。からがかたそう。クワガタは手も使わずに背中を押す。からが重くて大変そう。知恵を使っている。

オオクワガタは、とても力強く成虫になった。

ぼくもクワガタみたいに、どんなことでもがんばって生きていきたい。

入賞作品

いいのか、わるいのか

山田 三太郎 海外 シドニー日本人国際学校 2年



ぼくは、7月にウルルにのぼりました。

ウルルとは、日本ではエアーズロックとよばれているところです。今、オーストラリアでは、先じゅうみんのアボリジニを大切にしています。どうしてかという、オーストラリアは、元々アボリジニのものだったからで

す。ウルルは、もうすぐアボリジニの人たちにかえすため、のぼれなくなります。だからぼくは、さいごのチャンスだと思ってのぼりました。ウルルの一ばん高いところから見たけしきは、とてもきれいでした。でも、下りた後「これでよかったのかな。」と思いました。アボリジニの人たちは、ウルルにのぼってほしくないのです。ぼくは正しかったのか、まちがっていたのか、今もわかりません。

8月にえん足がありました。えん足では、アボリジニのくらしをクラスのみんなと勉強しました。何百年も前に、アボリジニが岩にいた絵が心にのこりました。ガイドの先生は、アボリジニの生き方をしんけんに教えてくれました。ぼくは、ウルルにのぼったことについて、今も考えています。



◎審査委員(敬称略)

児島 邦宏 東京学芸大学名誉教授
角屋 重樹 日本体育大学教授
小島明日奈 毎日新聞社執行役員 教育事業室長
加藤 超大 日本環境教育学会理事
日本環境教育フォーラム

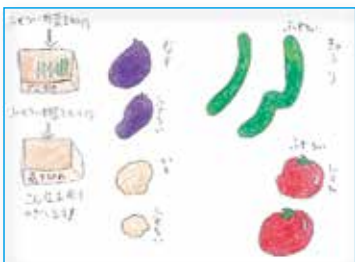
藤森 克彦 全国小中学校環境教育研究会会長
東京都品川区立大井第一小学校長
伊東 千尋 教育出版 代表取締役社長
小島 正利 教育出版 取締役副社長

入賞作品

ふぞろい野菜

和泉 なのは 東京都 日野市立夢が丘小学校 4年

私は、よく野菜が売れのこっているのを見ます。しかもぐにやぐにやな野菜です。こういう野菜をふぞろい野菜といいます。ふぞろい野菜がなぜ売れのこっているかを調べました。



野菜を買う時のえらび方は何ですか。私は、形です。形が曲がっていると切りにくいかと思って、まっすぐな物をえらんでいました。でも、曲がっている物を切ったら、まっすぐな野菜とそこまできわなかったのがびっくりしました。それに味もとってもおいしいです。

私は、ふぞろい野菜とか関係なく食べて、売れのこりをへらしていきたいです。

入賞作品

世界で一番古い森

岡本 莉亜 海外 メルボルン日本人学校 5年



ここは、オーストラリア、クイーンズランド州北部の世界で一番古い熱帯雨林。南米アマゾンよりも古く、きょうりゅうがまだそん在していた一億五千年前にできたといわれている。約三千種類もの植物の中には、絶めつぎきものも多い。私はその川で泳いだ。メダカ、ナマズや見たことのない魚がたくさんいた。

帰りに、森の中をあるいていると、きょうりゅうがいた!! と思ったら、ヒクイドリと目が合った。この飛べない鳥は、きょうりゅうの子孫かな? ヒクイドリは周りを見て、すぐに森のおくに走り去って行った。きょうりゅうも私と同じ景色を見ていたにちがいない。私は、そう感じた。

この森が、これからずっと、同じ景色であってほしい。

入賞作品

ツバメ

高村 百合子 静岡県 御殿場市立御殿場中学校 2年



一度、心ない人間の手にによって破壊され、今年二度めの巣を作った母ツバメ。しかも同じ場所に。時期外れに産まれた4羽の子ツバメは、すすくと成長した。私は見届け人。

夏鳥のツバメは、エサの昆虫がいなくなる秋から冬にかけて東南アジアなどに、もうすぐ異動する予定だ。

ツバメよ、目的地まで迷わずに行けよ、どこまでも。

人間の私も悩んだり、迷ったりしながら、いつか、飛び立っていく。

入賞作品

プラスチックでよごれている海を救え!

上地 莉那 東京都 立川市立第七小学校 6年



私は、最近「海洋プラスチックゴミ」の問題が気になっています。これは、ポイ捨てなど不適切に処分されたプラスチックゴミが、海に大量に流れ出て、海の環境を汚し、海の生物などに悪影響を及ぼしている問題です。人々が捨

てるプラスチックが、世界で海の生物の命を奪っているのです。

私の友達に、よくポイ捨てをする子がいました。初めはその子がポイ捨てをする度に、注意してあげましたが一向にやめませんでした。そこで私は、注意してあげるとともに、その子が捨てたゴミを後ろから拾うことにより、その子はもうポイ捨てをやめてくれました。

このようなポイ捨てをやめさせるささいなことが、みんなの家である地球を守ることにつながると、私は思います。

入賞作品

きれいな水

池元 さくら 福岡県 大牟田市立吉野小学校 4年



わたしは、そう合の学習で、たん水魚にくわしい今村先生に来ていただき、いろんな魚の特ちょうやせいかく、外来種や日本固有種、ぜつめつぎく種などについてくわしく教えていただきました。話を聞き、わたしはおどろいたことがあります。それは、「よごれた水に強い魚」がいるということです。「よごれた水に強い魚」たちはほとんど外来種です。

一方、日本固有種の魚は、「よごれた水に弱い魚」たちです。

今、人間のせいで川の水がよごれて来ている。このままでは、日本固有種はみんな死に、「よごれた水に強い魚」たちが生き残ってしまいます。かんきようを守り命をつないで日本固有種をふやしていきたいです。

入賞作品

高知の美しい夏

島崎 歩 高知県 南国市立大篠小学校 4年



わたしは、高知の夏によさこいをしている時、外国人をみかけました。その時私は、(こないなかにきてくれるなんて) と思いました。ほかにも外国人がよさこいをおどっているすがたもありました。

その時私は、高知の夏は美しくどんな人でもおどれるすばらしさをしました。地球となかよしとは、このようなことを表しているんだと思いました。

美を求める心について —アートと教育 ①—

埼玉画廊 竹内春香

将棋士の羽生善治氏が、「美しい棋譜を残したい」とコメントをしているのを見たことがあります。

「将棋における美しさ」とは、何なのか——羽生氏は著書の中で、以下のように述べています。「美しい手を指す、美しさを目指すことが、結果として正しい手を指すことにつながると思う。正しい手を指すためにどうするかではなく、美しい手を指すことを目指せば、正しい手になるだろうと考えています。このアプローチのほうが早いような気がします」（羽生善治『捨てる力』）

「美しさ」とは、とかく芸術、アートの分野における基準として一般的に認識されていますが、羽生氏のように勝負の世界でも「美しさ」を追求したり、そして今やビジネスの世界でも「美しさ」を求めることが注目されています。いわば、大人になってからも「生きる力」としての「美しさ」が必要とされているといっても過言ではありません。

少し考えてみると、この「美しい」という言葉に隠された意味には、単に表面的で視覚的なきれいさやかわいさなどだけではない、人間の良心、知性、良識、あるいは自分より大きなもの、自分の周りのものへの敬意、感謝といったような、より深く内面的なものが含まれているのではないのでしょうか。

「美しさ」＝「美意識」とも言い換えられるこの感覚は、例えば一枚の絵を複数の人とともに鑑賞することによって養うことができます。

絵をよく見て、まずは自分一人で見え



るかを考え、言葉にする、そのように見える理由を探します。このことは、自らの想像力や発想力を鍛えることができます。また「ものを見る」ということは当たり前のようにいて、実はあまりできていないことが多いのが実情です。ものをよく見るということは課題解決能力を鍛えることにもなります。

そして、次は人の意見を聞くことです。自分と同じ意見であったり、自分とは全く異なる視点をもっていたり、解釈をしていることを知ること、多様な視点、



埼玉画廊では、絵画の鑑賞教室やデッサン教室も主催（GALLERY Cafe ART MEET Netz 2019年7月）

多様な価値観の気づき、他者への理解にもつながります。

このようなことは、学校教育の現場ではすでにいろいろな場面で行われているかと思えます。これをぜひ、実際に美術館などに足を運び本物の絵を前にして、習慣的に行っていただきたいと思います。

アートに正解はなく、自由に創造的なコミュニケーションとなる格好の材料です。作品の制作者である作家自身も、自分は何を描いているのか、何が描きたかったのかなど、はつきりと自覚している人がすべてではないのも事実です。「解釈は観る人のご自由」と思っている作家も少なくありません。正解のないものについて考えることは、とても創造的で、世界を広げることにつながります。

これから私たちが生きていかなければならない社会は、単純な作業はAIに取って代わられ、人間にとってより重要なのは想像力や発想力であることにまちがいないと思います。また人間社会であるからこそその倫理や情緒も、育む必要があります。豊かな未来をつくるために、「美意識」は、子どもの頃から本物の美しさに触れ、教育でこそ養われるべきものであると確信し、期待しています。

竹内春香

埼玉画廊（有限会社エスパス・ミュー）専務取締役。
1980年、埼玉県生まれ。慶應義塾大学経済学部（島田晴雄研究室）時代には体育会女子バレーボール部で汗を流す。2005年、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了後、日本放送協会岡山放送局に勤務（ディレクター）。2014年より現職。博物館学芸員資格も取得している。一男一女の母。

オリンピック・パラリンピック教育の鍵を握るミドルリーダーたち



スポーツ庁オリンピック・
パラリンピック課
課長補佐 遠藤 翼

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会がいよいよ目前に迫ってきた。

スポーツ庁では「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」（令和元年度：45地域で実施）を推進し、オリンピック・パラリンピック教育に関する好事例収集や情報発信を行うなど、大会本番に向けた機運醸成を図っている。今回は、オリンピック・パラリンピック教育の盛り上げに大きな役割を担っているミドルリーダーたちに焦点を当て、その取り組みを紹介したい。

オリンピック・パラリンピック教育というと、学校現場で行われる特長的な事例に注目が集まりやすい。これらはもちろん重要である。一方で、スポーツ団体等と連絡調整を行い、限られた予算をやりくりし、授業づくりのアドバイスや取り組み評価を行っている方々の存在を忘れてはならない。

スポーツ庁事業においてこれらの役割を主に担うのは、筑波大学・早稲田大学・日本体育大学の3大学の若手研究者たちである。彼らは、学術的な知見を携え全国を飛び回り、教育委員会に対して授業づくりのための研修会を行い、事業の進捗状況を確認し、好事例収集・自治体間の共有や児童生徒へのアンケート調査等を行っている。スポーツ庁では、さまざまな場面で大学と情報交換し、よりよい事業運営に活かしている。

こうした若手研究者の取り組みにより得られた知見は、わが国のオリンピック・パラリンピックに関する学術研究の充実、関係機関間のネットワーク維持、学校体育の授業の質向上はもちろんのこと、今後のパリ2024オリンピック・パラリンピック大会



への引き継ぎにも資するものである。

また、各地方公共団体の教育委員会の取り組みにも注目したい。スポーツ庁事業では、教育委員会内のミドルリーダーである指導主事が担当となることが多いが、非常に情熱をもって取り組んでいただいている。

各地域の学校の実情はさまざまである。全国一律に同じ教育内容を実施すればいいものではない。学校の長所、課題、タイミングに適した形で、楽しくオリンピック・パラリンピック教育を展開できるようにするには、学校現場に精通する指導主事の知見が不可欠である。また、スポーツ庁事業の運営にあたっては、教員出身指導主事としては不慣れな事務作業も数多くあるのではと思慮するが、予算配分や決算処理、学校担当者を集めた研修会開催、報告書作成、アスリート等との日程調整、同役所内のスポーツ関係部署との調整などを担っていただいている。

スポーツ庁としては、こうした若手研究者や指導主事等に対して、最大限の敬意と期待を伝えたい。今後、聖火リレーや大会本番を控え、2020年は総決算の年となる。その成功の鍵を握る彼らミドルリーダーが、モチベーション高く、最大限の力を発揮することができるよう、全力でサポートしていきたい。

イラスト ひらた ゆうこ

第18回

地球となかよしメッセージ

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真（またはイラスト）にメッセージをつけて表現してください。

◎主催／教育出版 ◎後援／環境省、日本環境教育学会、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞



教育出版

「地球となかよしメッセージ」事務局

TEL 03-3238-6864 <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

作品募集

(2020年7月1日
～9月30日)

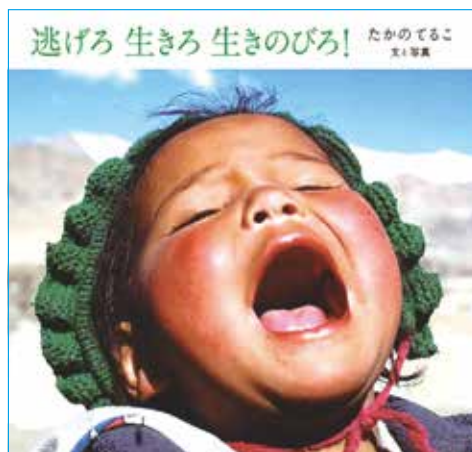


*第17回(2019年度)作品のお問い合わせについては、「地球となかよしメッセージ」事務局へ。

「生きるって、なに？」 ～大反響の本が生まれるまで

ほ・っ・と・な・出・会・い

地球の広報・旅人・エッセイスト たかの てるこさん



『生きるって、なに?』『逃げろ 生きろ 生きのびろ!』文と写真 たかのてるこ (各500円+税)

小学生から90歳まで、 広い世代に反響を呼んでいる本

昨春 大学の教え子の悩みから生まれた本『生きるって、なに?』を5000円でシェアしたい一心で自費出版したところ、口コミで広がり、全国の書店やネットでも購入できる本となり、シリーズ累計12万部になりました。
私自身、今まで幾度となく落ち込んできたので、教え子のためにも、今後の自分自身のため

にも、元気が湧いてくるような本が作れたかったです。「私はなぜ、生きるの?」「生きるって、自分を丸ごと愛すること」「それは、自分を大事にすること」「それは、自分をイジメないこと」……素朴な問いと答えに、世界中で撮影した笑顔の写真をつけました。おかげさまで、教材として使ってくれた先生が生徒全員の感想文を送ってくれたり、全国からの講演依頼もひっきりなしで、幅広い世代から大きな反響をいただいています。

逃げてもいいんだよ

第2弾は『逃げろ 生きろ 生きのびろ!』。一番伝えたいことを書名にしました。世界でも日本だけが「10代〜30代の死因1位が自殺」なことに胸を痛めていたので、「今いる場所が、心が折れるぐらい苦しいければ、置かれた場所であくなくともいいんだよ」と伝えたいのです。
私自身、18年間勤めた会社で上司に疎まれ、人間としての尊厳を奪われたような気持ちになり、心身がスタボロでした。それでも、「会社を辞めたら人生は終わりだ」と自分に呪い(＝制限)をかけ、自分自身を虐待していたのです。でも、そもそも、人類は「逃げる」ことで、生き延びてきました。アフリカで生まれた人類が世界中に広がっていったのは、「今いる場所」が、何かしら居心地が悪かったからです。生まれた場所が最高の居心地であれば、故郷から旅立つことはなかったでしょう。「生きるのびるために逃げる」というのは、言い方を変えれば、「理想の場所を求めて旅立つ」前向きな生き方なのです。

この本に、「自分の短所は イコール 長所でもあると気づくこと」「何があっても大丈夫! 朝起きたら、生きてるんだから失敗なんかしてません!」と書いたのですが、人と自分を比べて自分をイジメるのをやめて、「毎日生きてるだけでめっちゃ頑張っている自分をほめること」をぜひ実践してほしいです。

「虫の目」だけでなく 「鳥の目」を持つ

私は、人生には「二つの目」、「虫の目」と「鳥の目」が必要だと思っています。私たちは普段、目の前のことだけに必死になる「虫の目」で生きていますが、日常から離れて旅に出ると、視野がグッと広がり、「今自分が生きている世界だけがすべてではない」という俯瞰の視点、「鳥の目」をもてるのが、旅の醍醐味ではないかと。
大人は「昔はよかったのに、今の時代は……」と言いがちですが、「今」を否定するのではなく、地球を俯瞰する「鳥の目」で見て、発展途上ではありながらも「今」という時代は人類史上最高の時代を更新中であることを、次世代に伝える係になっていただきたいのです。
若い人たちが未来に希望がもてるように、この本に込めた思いを伝えてほしいと願わずにはいられません。「人はみんな、生きることを楽しむために生まれてきたんだよ」「まだまだ問題はありますが、世界はどんどんよくなっているんだよ。昔の人たちが頑張ってくれたおかげで、昔よりも今の方がずっとよい時代になっているし、みんなが頑張れば、未来はもっともつ」とよい時代になっていくんだよ」と。
子どもたちにはぜひ、呪いではなく、よい魔法をかけてあげてほしいです。



たかのてるこ
「世界中の人と仲良くなれる!」と信じ、7大陸・70カ国を駆ける。ベストセラー『ガンジス河でバタフライ』は、長澤まさみ主演でドラマ化もされ、話題に『ダライ・ラマに恋して』『純情ヨーロッパ』『あっぱれ日本旅!』等、著書多数。全国の小中高大学や自治体での講演は3500回を超え、メディア出演、大学講師など、幅広く活動中。
HP/ www.takanoteruko.com

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆気象予報士の南さん、那須トレーニングファーム代表の広田さんご夫妻の記事から、子どもたちへ自覚を促す場の設定や働きかけの重要性を強く感じた。今後子どもが自分自身を考える機会を多くもてるよう積極的に力を注いでいきたい。(東京都 S.H)
- ◆プログラミング教育～スピードある社会変化(改革化)に対応する教育として大切。子どもも教師も楽しい体験ができる事例をたくさん知りたいものだ。(青森県 O.K)
- ◆きょういく見聞録の「イエナプラン教育」については、本市教育委員会でも取り組みを始めたので興味深く拝見した。トピックスの「感性を磨く」もよいですね!(愛知県 T.Y)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。
わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。